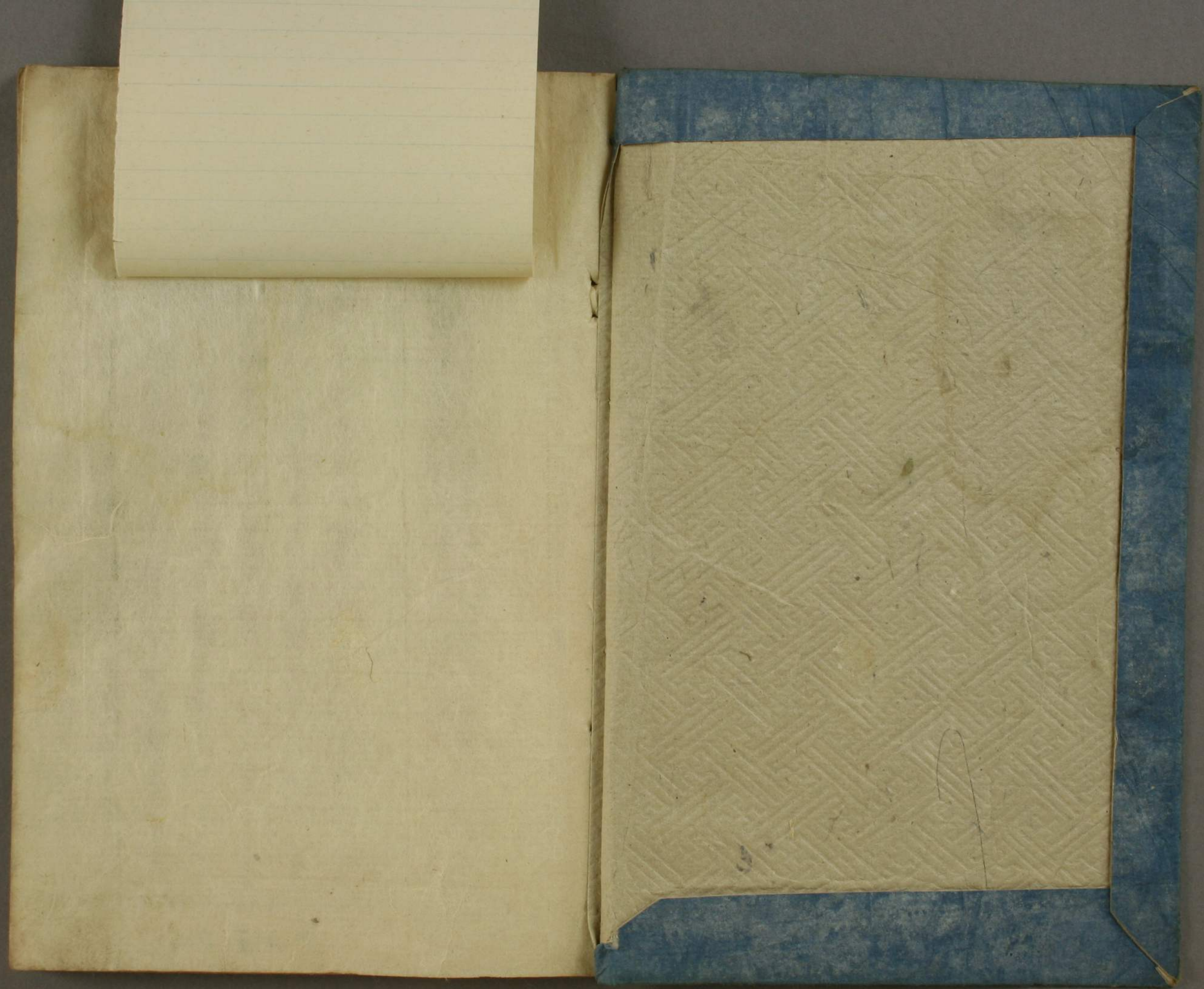


文久二年

医官言益社啓幕者、海外使節
隨行ヲ察セテ歐洲ニ往キ歐西
紀行二十七卷ヲ作ル其内二十卷
ハ主トシテ和蘭ノ事ヲ記セリ
日本村物語年表

*一本作履





歐西紀行卷之二

坎三日快晴ありつき品川沖を過ぎ出づ横濱
 よりこり志星らと遊をわたりし時本館より
 祝音等より浦賀をくく安房上總の海岸を去
 紀右に顧色を富士の山影日よめくやき向空
 皎くたり在しうり見ハ嶺山巖くやしくし以
 るくき雅を多するは似たり山水清浄を愛し
 世界の第一とを稱し惜むらるる船のちり
 ここのちやくれハよきく見えまもぬきを



大正己行
 二
 一
 一
 一

うらみあり

浦賀なる海の関路を越え是ハあわと以
ふまよきとる以て里とれより下回沖におも
むき外海におむるふ水と天と一つよつらあり
勝くやしとて下りて

廿四日とあり少くも所り駿河沖より伊豆志
江を越富士城よりと見え八丈磯を左におか
しそは中をゆき平越刻色より逆風つよと吹
ひれ舟帆をおろし石炭をまきと蒸氣の勢を

つよとせれと風益しく何とせ波さうまきて
舟長くまき浪の音ハ宙空つよと降るぬと船
の車も雷の鳴るぬと人々と結えりしみをな
くさせんとし酒樽を聞きとめしんとてさるよ
浪高き舟の船の動とせ志きりなれハやう
て程おまらひと逆と吹す所とを後とみ阿き
せきて、枕を出しと縁よりありおのるしと
き草よつとせ其庵きよしとけはひと舟のそ
しとことつらよ四半里あり

りろこしつらし昔はあめくあれハ心
そゆけ沖津波は

廿五日ふも風面つよと浪阿らきあふき
ふよりつよし勅撰と申交より三申交より
紀州越前浦より阿波沖より和歌山より
そゆけと申交のよと阿らき小島と申交のよ
器物と申交のよと阿らきと申交の時ハ外國
人より申交のよハ阿らきと申交のよと申交の
この初をよいりて出立ぬ水師のよと申交上

よとて指圖する多やまを尋ねのけをりり
る其骨折憂い感心せぬ者そと申交半十二字
又三十餘交の勅撰よ申交出立時帆をりり
法如く船中の初をよと申交のよと申交のよ
人皆面ををりて申交のよと申交のよと申交
よと申交のよと申交のよと申交のよと申交
よと申交のよと申交のよと申交のよと申交
廿六日土佐沖をり地日雨を尋ねやと申交

ときとやらよてふ七十里ゆきしとて
 亦むかふ彼流の山はわのしと露めり
 空を春めきよ光るといふうちの毛のまうり
 廿七日日向仲より大隅海岸をゆくこと六十
 里薩摩沖より肥前長崎より向ふ此日此れとが
 よと春のぬく船の上よ出て四方をみる時
 時をくめて沖の如くは蒸氣船一艘を見たり
 中ちかつかうなるまうし帆柱より丸の脚
 國旗を揚てりり阿波の大名の船なるを

四方は海八重の汐流毛静まらばは船
 此は後代に栄由く
 廿八日多なる霧始りては霧ら穂らるは
 始日亦り去と加て北緯三十一度二分
 西経百二十九度五分海路凡百二十四里江
 戸横濱港を出しより去るまう凡三百六十二
 里廿六日よきき今日の刻よ肥前長崎の港
 に入津せり此港を四方とくく山よて世
 よこれと袋港と云實よ要害よき隣と云

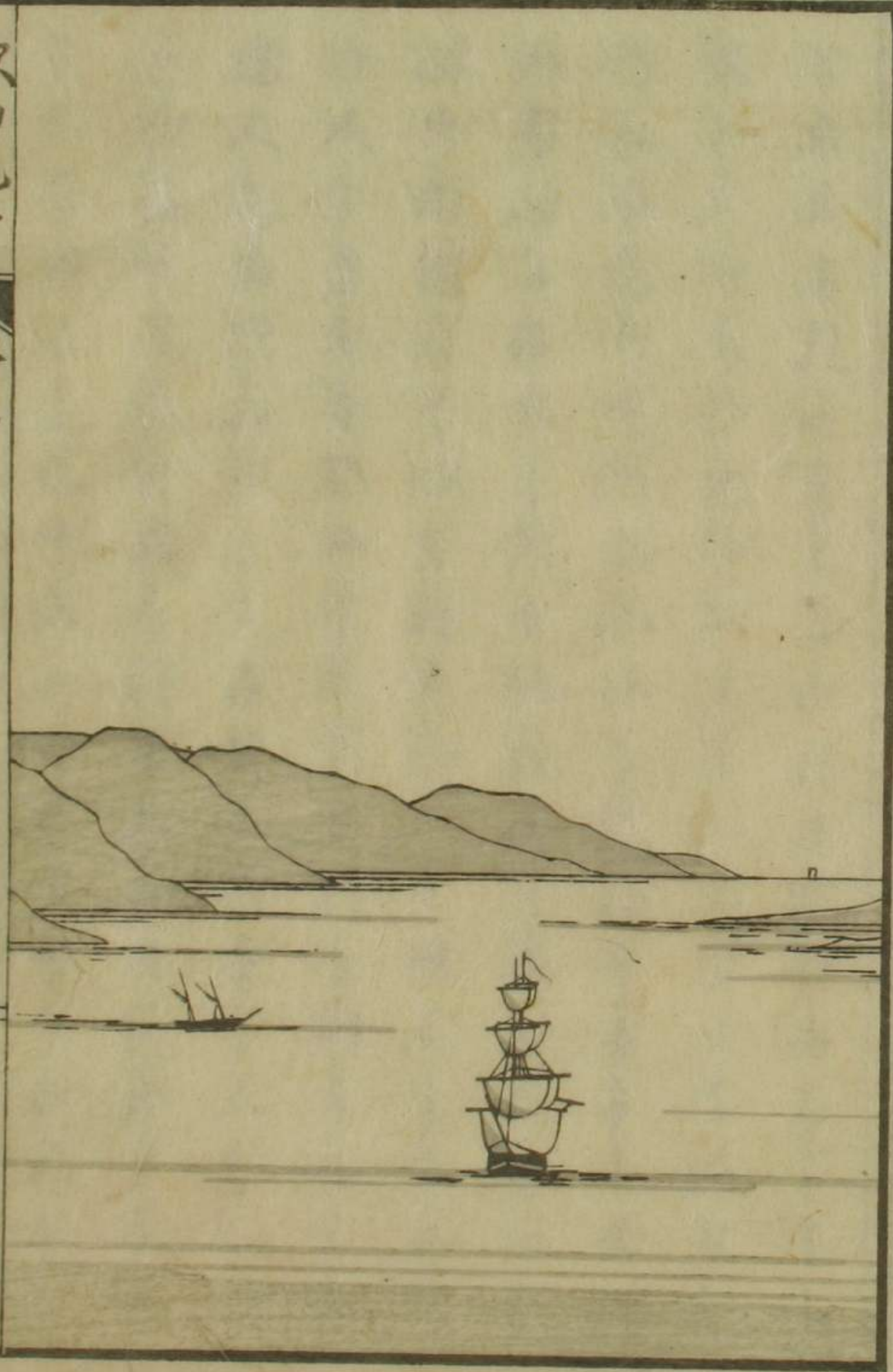
入口より二つの臺場あり大砲數百挺を掛即黒
 田砲臺兩家の臺場より世々天然の磯と以て
 毛の津よりあらはれしと云ふ外國船十餘艘破れ
 落しと云ふありしつれも紅白の旗を立あり
 是ハ皆薩蘭陸の膏舟なるよし
 此九日晴向方よりあり石見守能守上陸す
 此時ア一テ之船日の丸の法國旗を掲てまは
 の上陸を告ぐを以て九時舟中の石炭より
 火以て一山火におよぶと兼て火を率て

長崎湊入口之圖

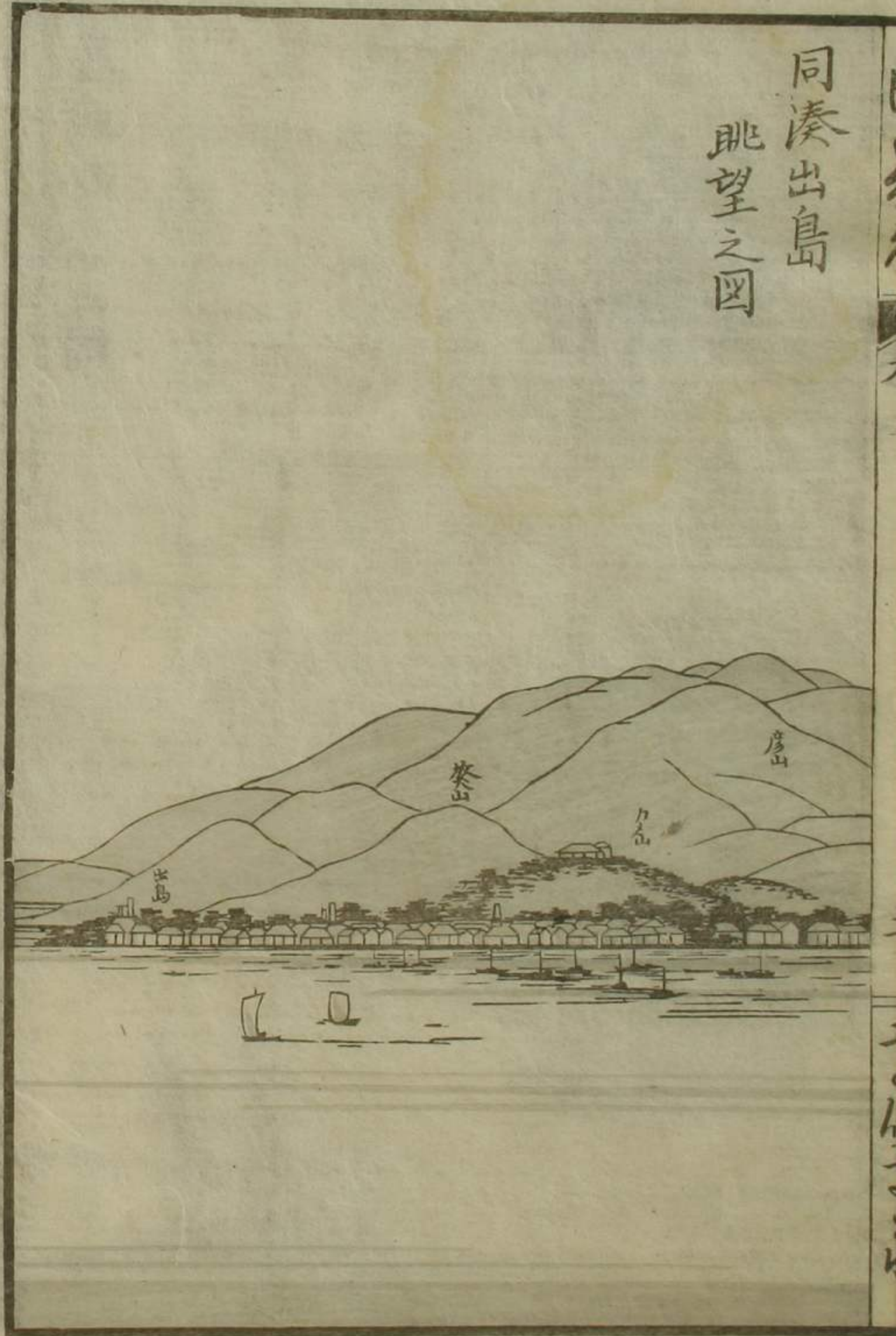


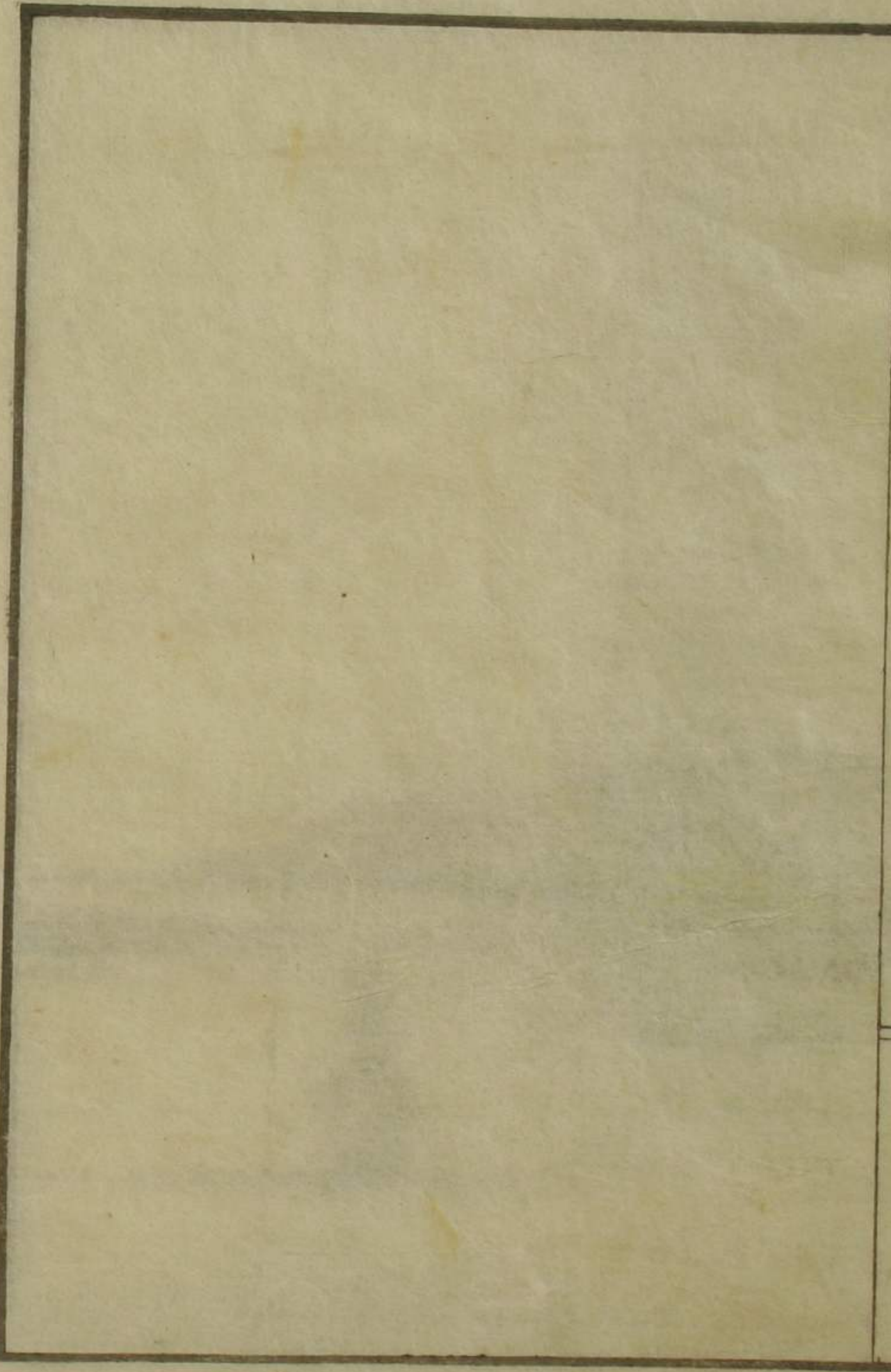
國語紀行 卷二

五 鳥居



同湊出島
眺望之圖





子常もあれハ甚之ニカ絲を鼓打をら〜水
 夫と也をあつ免ホ〜フ〜以不皮〜と作りと
 物を海の中一投入水を汲揚お帝〜これ
 ハ暫時は然火〜人も怪我をう〜〜ともし
 此火焰消〜うつりぬハ心ぬ〜せん〜を舟中
 の人〜き水をひや〜〜とれを以〜とと
 國人〜あつぬ帝〜石炭〜水等をふ〜む時
 ハ動揺の旨〜自然なれあ〜火法出〜多あり
 とも常の〜〜之杖五〜以来學問〜先〜石

次頁已行

養生

炭と水をぬきしりしゆ一とぬくする所の出来し
ありとせ凡蒸氣船とせる者常とこそを舟一
の心得とせしゆ

城の晴れ十字下陸を此時亦ア一テニ
船より兩國の旗を揚事前日の如くまりの上
陸を志し志を告げの役人共旗と懸し彼所
場の役所と出迎ふ是より警備の者ともせし
ましく 結率りの役所と送る此處ハ海岸を去
こと僅と十余町市中もつと此繁華あり海岸

結右の町を浦町と云其次を大村町と云龜山
の嶽石物師並に唐物類を賣せぬふ其次と云
興善町後興善町新興善町の三町あり家ごと
と皆招師立て奉り以とせしりしゆ ありハ
所郷の事なを思ひ出さ

海の日ハ於長崎結右九とも家ととの門
と招そくせしき事申のつらきを依然んとす
廻頭柴田貞吉郎と共と長崎を以組頭中務信
吉郎と家と由きハ湯島とせしりハやうと信

くの池をよあはれりりり

世の人を糧くをくる年法魯身者長きき
よふふハきより九字仲蒙氏を出て本興是
町豊後町を通り小川町より八百屋町以代官
所を右よ曲られハ正面よ高き山阿り樹木生
ハ茂り多る地を立山とゆふ山の中腰よ寺あ
り安禪寺よ山ふ山の正よ祠あり即
東照大権現を祀ると云蘇八皆士官町とて其
傍幸所の屋敷並よ倉所阿り其後ろハ岩系と

名寺目付の屋敷也持れより左石の池ハ皆
寺社回宅多しまの屋敷の東北の隅又樹木生
ハ茂りよる山阿りおれを金毘羅山とゆふ眺
屋よき所と其東南ハ七面山放火山彦山とて
三つの山阿り毎年七月十五日の釈迦山上の
寺院の墓所毎よ燈を燈も立満山花の如く寺
賤男女雲霧の如く群集して見物するよ一こ
色を長崎第一高の見物ありとそお色よよつ
と放火のよ山名ハ出来よるよ一左よ高り

西三軒の家有り松の大木立ならみ林打り
 おもく家康を画まかくの如しこれハ急山の
 焼物師の家也暫くも縁て又市中へ出寄合町
 丸山町へりあり世よ名なき樵女町ありハ
 一鏡せんとして町役松亭某を同是として家毎よ
 兄弟を家との造作何をも風流を意と就中よ
 き且千代より岩花肉構の二軒あり先つ二階よ
 登造ハ床の室よ明人の山水軸掛とあり其草
 勢墨色紙よりある花肉の二字の額有り唐人

伊予九の書あり其外屏風を紙皆支那人墨跡
 あり庭ハ雜木を植て唯大木の杉数本枝を交
 へ縁苔藓と竹とて自然の趣有り外堂んと樵
 女屋の家とハ思ふれき出さ出でて唐人屋敷
 よ急造ハ入口よ惣門あり出れをハ色ハ左右
 ともく高人屋也正面よ赤き旗二つを立と
 り号ハ清和の字あり祝喜天の祠有り瓦葺根
 よて日本の如し門毎よ額を柱かくしを掛堂
 の中ハ皆佛壇也縁をの真鍮獅として鼻をの

大正九年
 十
 馬場

く佛壇の左右ハ書画の軸を楨是まこの人並
傳人の名家の筆よて目をおとろくまあるを
あて所蘭陀を發より是ハ海岸より水中へ小
嶋を築き左右水に臨む予一町余二階三階何
れも尾葺四方白壁よていろよ色言大之氣を
出嶋の所蘭陀やしきと云むこの葡萄形人天
竺國あとも其の黄金佛を毀て重よ擲て七十
餘萬兩を以て其金を持來て此嶋を築き椽椽と
其其勢海亦無敵ありと云其後

大猷院様御代葡萄形人の往來を停止し強入
し後ハ所蘭陀の持あるより是より彼所場
よ趣き小舟よ榮りア一テニ船よ兩よ稍七時
也久ふハア一テニ船よ石炭を積入る五百噸
船の上を山の如し舟の長きるもたし船方よ
寢所よつく是より以下ハ英吉利西の星敷よ
て記を所海流ハ中七丁三分三厘を一里と
陸路ハ十四丁三分余を一里とを各國異同あ
れと航海ハ暫り英里を西の法則よよれハ経

なも又習く英を里西の測量よりて記さる
のり

各國里法ノ大略

- 英吉利西ノ一里ハ 十四丁十間〇五尺六寸
- 同海 十七丁八間三尺余
- 佛郎西 一里四丁四十四間二尺五寸七分
- 獨逸 一里三十一丁五十三間四尺余
- 阿蘭陀 九丁九間五尺九寸九分
- 魯西亞 九丁四十五間五尺四寸七分

以太里亞 十三丁三十四間四尺八寸五分

各尺度アメリカ用之

- フハトゾム 二ヤルト 五尺九寸四分
- ヤルト 三フート 二尺九寸七分
- フート 十二インチ 九寸九分
- リンク 七インチ 六寸六分三厘四毛
- インチ 八分二厘五毛

雜貨秤 藥秤コレト異ル

- ホント 十六ヲンス 百廿分〇三毛六弗
- ヲンス 十六ツレタマ七分五分〇二毛二弗

ツレタマ 卅七ケレイン四分六厘八毛九〇
ゲレイン 一厘七毛一弗

佛蘭西之尺度大略

メートル 三尺二寸九分九厘九毛余
テシメートル 卅九分三寸二分九厘九毛余
センチメートル 卅分三寸二分二厘九毛余
ミルリメートル 卅分三厘二毛余
メリヤメートル 卅分三厘九毛余
キセメートル 卅分三厘九毛余
ヘクトメートル 卅分三厘九毛余

デカメートル

十メートル

三丈九寸九分九厘

同衡秤大略

ミルリカラシマ 二弗六四六二
センチカラシマ 二毛二弗四六二
デシカラシマ 二厘六毛四弗六二
ガラシマ 二分六厘四毛六弗六二

歐西紀行卷之三

文久二年壬戌西月元且始日空よりりり
 之波種をらる余茶囊中より唐籬を以て一船
 中は新年を祝ふ吾杯をさるめあり始日西
 洋第一月廿九日也曉より波の港を出帆一信
 の島港にいふ隣より向ふ北緯三十三度二十分
 経交面二十九度二十分海路三十三里より
 白卒の疆をさるる

幾年来よりさるるのむとさるる数上

り脱ふ事さ能物事
 以年の何しき意やまハ左らハるん之打
 蓋子子代をこむきを
 大海をより庭の井とく之何たる物事水
 こそるハ来よりり
 喜さぬと目さく澆より是むありくふ也
 和さぬる日の事能事
 年浪者船を海遊とく海ら流きめふ能
 空も以ふハ出そふれ

二日西洋一有城日也城日空もれ微風候候の
 ところなり船をくると百八十里北緯三十度中
 一分経交百二十四分交四十九分をり

わくのやとのる國の喜も空意と意の衣と
 去へととるり

三日西洋三有一日微風候と琉球をなくめし
 ゆる子ぬ十里風何く之波立と船動とこと凡
 そ二十交より三十交よむる舟中の棚より
 一器りのことくともまろひ落ると毎事ぬれ

二日西洋一有城日也城日空もれ微風候候の

時水字共も同く候ことありては是れ帆を
市おろし置くことなれども也石炭を早く蒸餾せ
つよと置くこと常より三倍なれども沸る
着波の着は響あひ阿との雷の鳴るの如く
人々皆食事も知らずと候る出とも出来候
ぬききを記せば是れなり也候十二時より
少く候はこたり此日者石炭を焚くは數百噸
なり是れとも舟のりりハちのり二百九十
五里北緯漸く二十八度十四分経度百二十九

度八十一分

舟よりふくみよりき候の旅衣きのふも
以ふれかてを留るをき

四日順風をくく日始る候と知りては臺灣
舟よりふくみよりき候の旅衣きのふも
北緯二十九度二分経度百二十一度四分
舟より百八十七里此舟より常は賊船多きと度
東よりつくとしはあき候は候ともハ候と此所
母と品物をくらせり候こと来り候と又候

と大瀕有りとも水子とも云ふ一めり夕方よ
いぬりとも舟のふゆとさそ一とら舟を
り指圖の勢やまた時とをを見れハ弓張角さ
しいてく彼よりうらむさ備きそめをかめ若
し志をうと有りとも一法方よりり一と西洋
の舟九時あり

ときゆて一有法と舟よりりともよあ
もめをらん唐の塔ら

五日宣をれ其間をり舟りこともや一北緯二

十六度四十五分西経百十七度三十五分舟路
二百三十里由きてそ一航と磯少おつ一き毎
るを居る番港のちりきとを知ぬハ人々
ゆつれも喜ふけしき有りて操るも能もな
りたり船日ハ西洋に自三日也

白よ自よ今をさるるにあつまをきし
と一彼も去来とありたり

六日宣曉出渡の港よりうらまを八百二十五
里を六日とるる唐の番港のちりきとつ

より此地西洋第十一時也 日辛巳

古一のりあといり今ハたきき

といふ名はななりり地際といふハ新安縣

の海濱より緯線赤道の北二十二交より

緯線赤道ありりよりより北より北より

といふれなり海峯ありりよりより岩石岨

といふよりよりありり平山といふ

山はよハ学本はれより山の麓赤より西

北よりよりありり就中レエスコール 谷地といふ

所をよより地なりよりハ樹木生繁りて

かといふより有るを極よりよりありり自

の夕へハ人雅なよりよりより時を作り

酒をのりよりより東南の濱にハ隣口より

町家よりより警昌の地なりされ土地せ

まよ纏よ數十町なり又海岸よハ高船数艘有

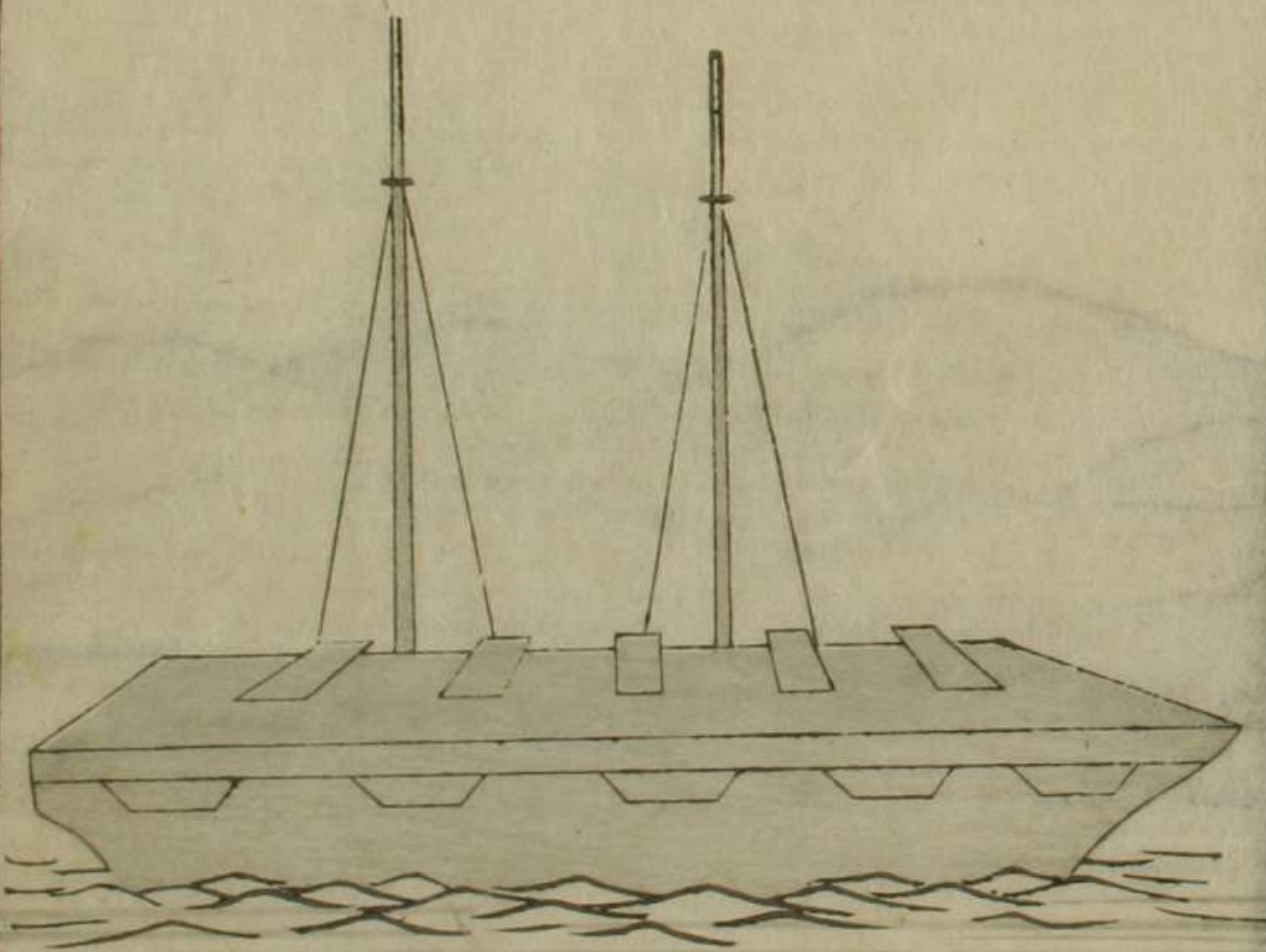
る平生ハ疫病ハ瘡瘡よりより病人を

よより入る長生よりより外國より軍船

よより押むけりり時者病人をよより移り地

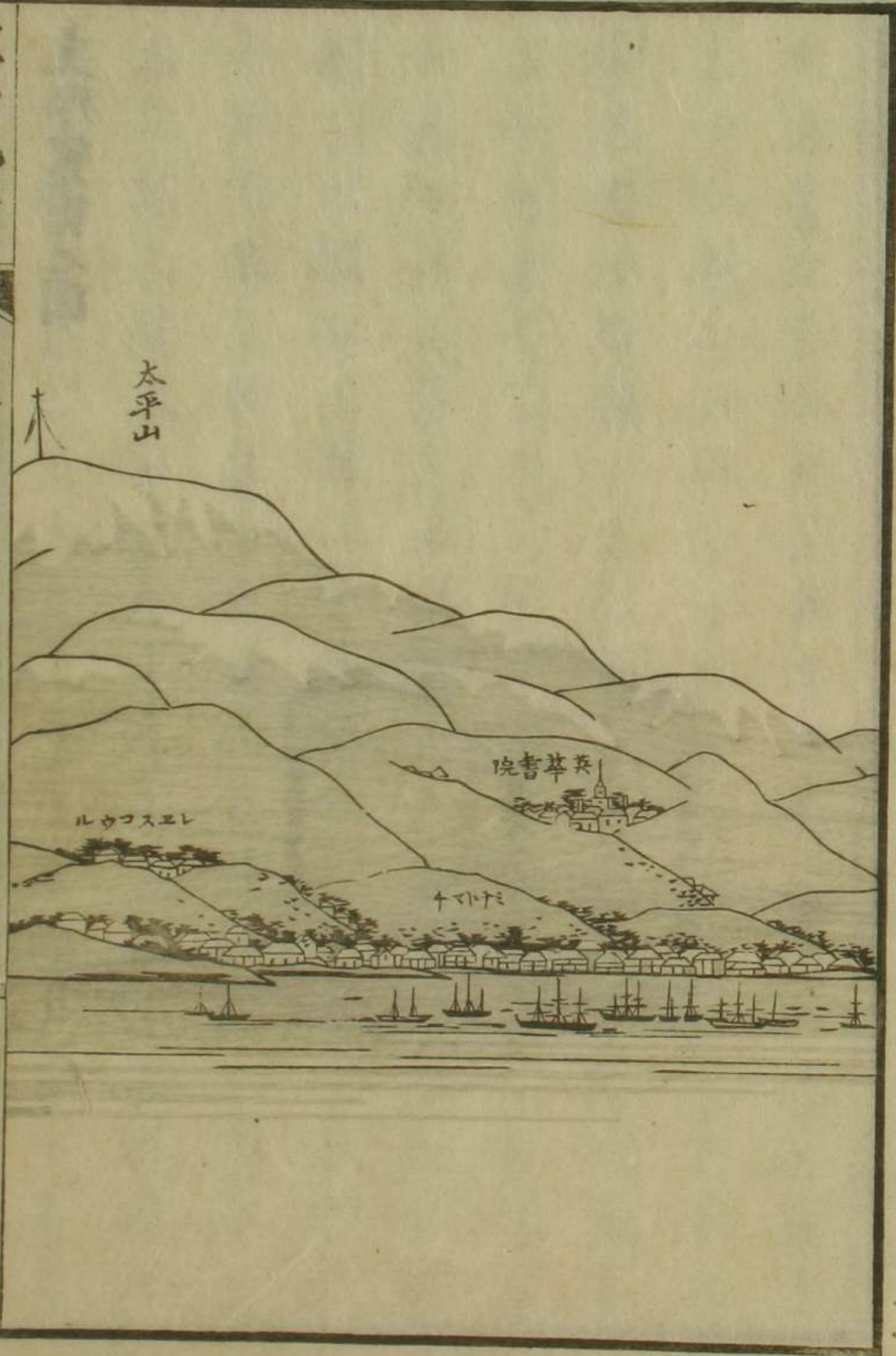
を臺場より舟に載せ浮臺場といふ此舟の造り方ハ昔の軍船とも違ひ一種の作方也舟を末よりとせり其舟國々諸港にありつ満りと此ハ帆柱ハ柱根を括ぐる如く蓋ひて交易を又或りありあつハ海も深ぐれハ以かある大船より多き如きくは如く多量山下の水必深くと以ハ虚云をらん此ハ元來諸島の所領とれとも是光と以ハ未だ初英吉利西人の岩を買ふとよせりこくよきつり此地面を借り

浮臺場船之図

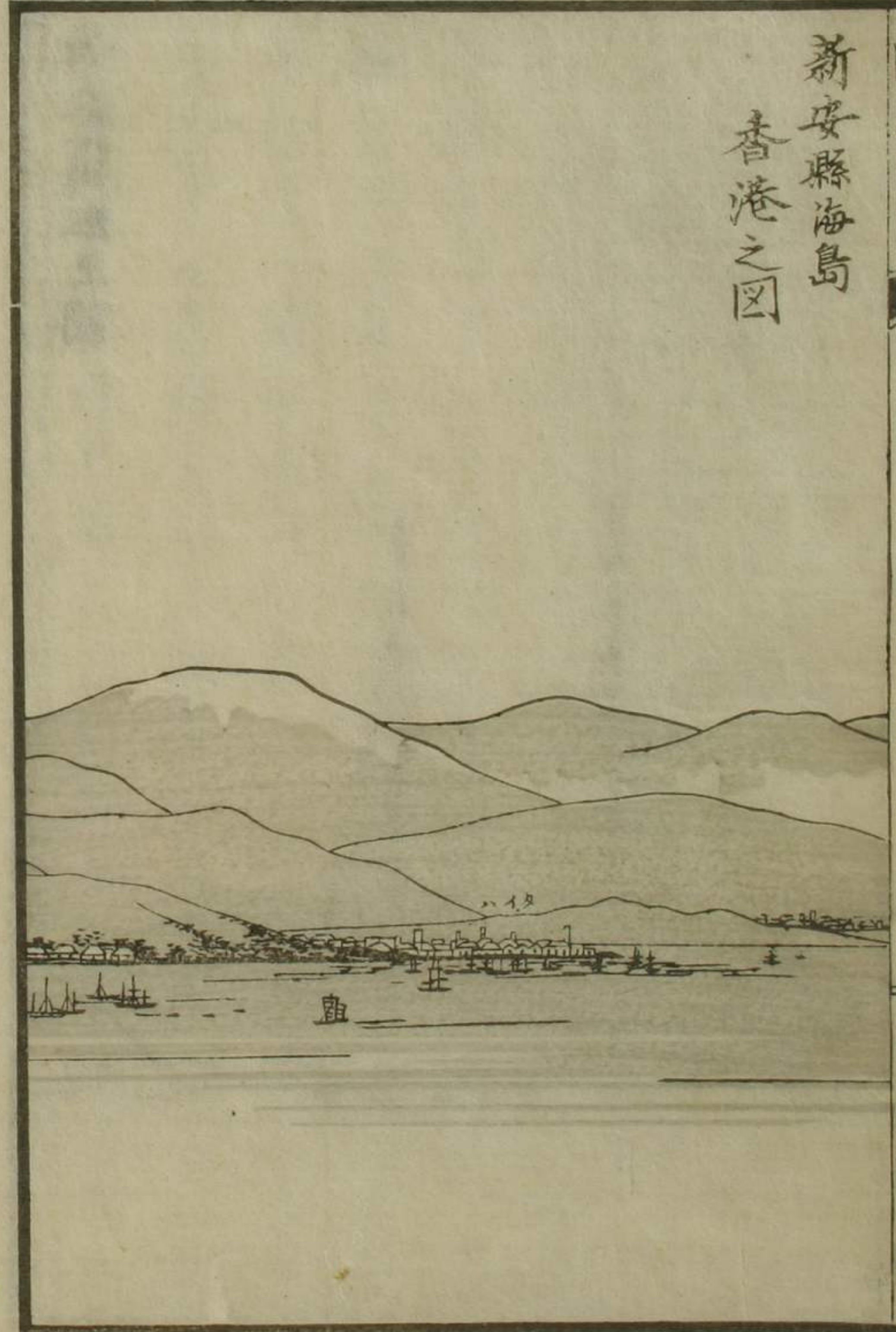


大正九年

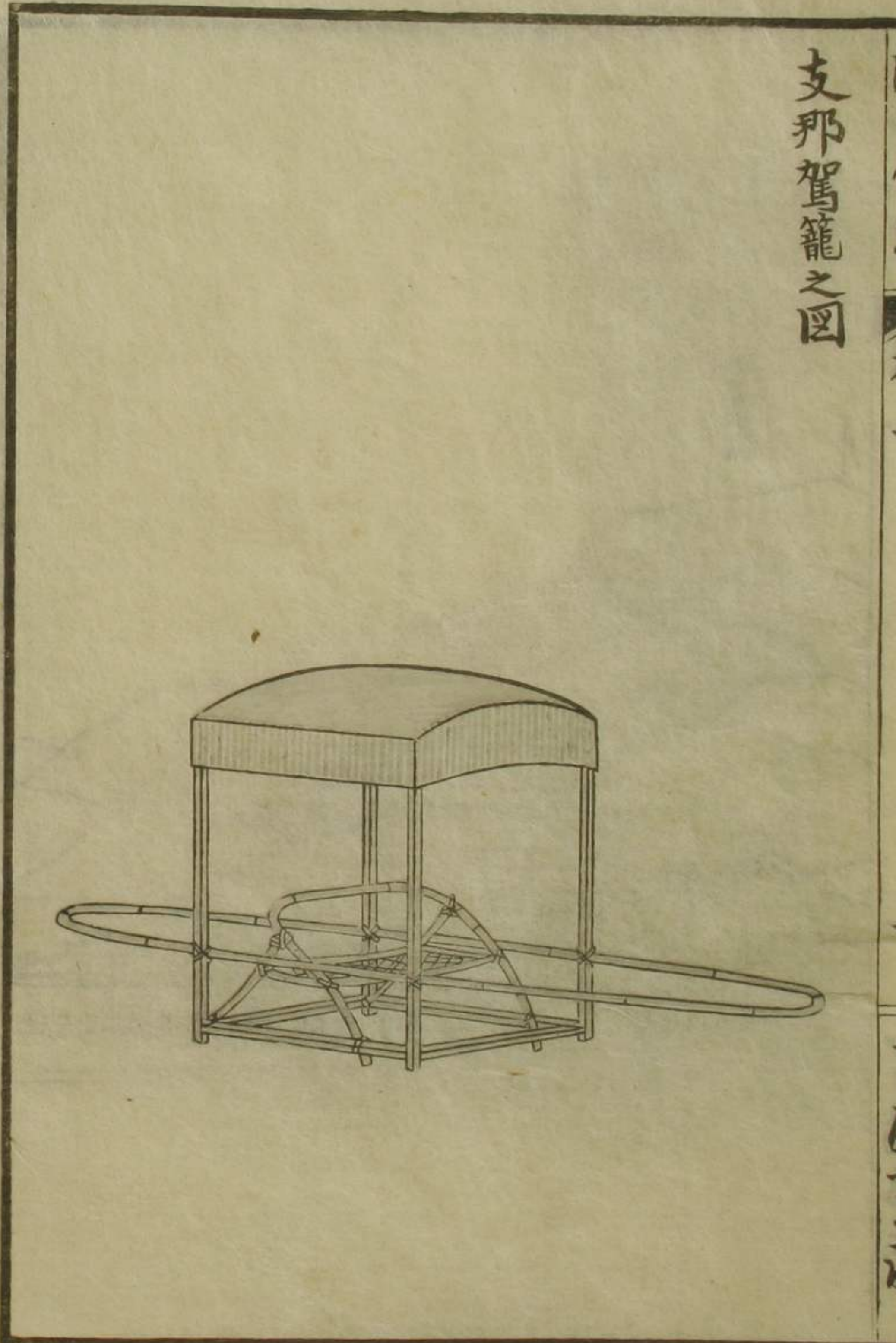
六



新安縣海島
香港之図



支那駕籠之圖



其後道光甲午年上海之戰
 以不支之戰よ
 よつて遂に此地をうとひ取り
 常時よらハ不
 跡英國の所領となり
 多々英國の支配せらる
 る廿年余なるよ
 一さきとも土地の人
 者何れ
 も元々めえ清國の所領
 となるとを疑ひて英
 國よ心服する者ハ
 一此地を纏よ四五里市
 中にて狭くさきとも
 厦門上海の利を
 集んら
 爲し英人運上をゆる
 一とら
 其上海國の
 商人船を
 集むるとも
 一とせよ
 運上を
 以せり

法國よりくるる来りて交易する事ありて
 日益々警昌を毎年来人別の益を予池あり及ふ
 而も非在市中と大なる役を云々あり一ツハ
 英國の在り好一ツハ英善書院とて學問所也
 一ツハ審局とて勅定役所云々一ツハ以てれ
 三階作りてとる大の家作あり
 七日ふふとてと破おろしと上港を此時奉
 りの船海軍と近する時ヲ一テン船より日奉
 の船中を揚ぐれハ陸軍を旗を召しと祝炮を打

つと中五發塔と登れハ去りより駕籠とけら
 志む其駕籠の作り方々奉りてハ大と異り
 又其足も亦とてその所を末といと去ま
 より教丁ゆきと椽館とて^{コンクリート}なるもの
 長を雄温とて以て暫時とて^{コンクリート}なるもの
 もありぬれといつても其肉をれハ食しと
 一強とて唐人の料理を鶏屋とて清和の酒を飲
 ち始て微疎を得ぬり^{徳島の島本の本陣}食す終り各
 見物せんとて市中とて由と旅者の西敷町と勅

宣統新あり大なる家作りより三階五階あり
 軒はハ吉くれをのけ魚ハ確い子まをとり柱は
 ありハ皆細密の彫物なりよく法儀司の名ハ
 レモントと云座中ハ毫とみ環らしき字本
 あり以つても花巻也予此を取て押ふよ名
 り其等ハ物産類に出さくよ一つ内をのり
 あり英國結名ハフケールと云書きハ人を量
 り輕きハ一毫をも遺ハ其部を精密法物あり
 其價七十五元 日本の四十五
兩程の幣といふ夫より數町あり

ハ市中ハ商人店數百軒並ハとり何をも確
 子少板を以て品物のよふふとを志すあり是
 且塵をふせき並ぬ人を認るるなるハ一又
 數丁ハ支那町と云ふことハ左右皆唐人の
 商店也家毎に額又ハ柱りえしをうと夫ハ商
 ふ所物の表を書付てありあといハ業師の店
 ハハ彩若淨撰登客とかき又文房具をうる店
 ハハ宿來第必落蕙外墨地香名と書ある其筆
 勢墨痕を美なり又花ハ曲り數丁ハ遊ハ遊女

町あり多ハ朱塗ト云ト路三階ト書簡をわけ
 柱もろし窓もろと又雅味あり女をいつきもハ
 さき環を身よ受き通し髪ハ形ハ長ハ短ハ色也
 在りト并替ハ髪ト少ト髪ハ色ハ皆生ト髪也
 男ハまた髪をとりて其中の毛を三つおし細
 糸是トハいれ毛有りて何れも地ト記云ハ
 と書くトハ満州ト云ハ変法俗を云ト又
 數町ありて學問所ト云ハ此學問所ハ館司ハレ
 ソト云ト云トト云トトハ日本其外諸國ハ文書

稽古せしむ日本の書物ハ外國ト記書も數冊
 卷ありトハ英吉利西文字トテ注を書トあり
 又天主教の書物番港新書紙中ハ新報選送貫
 珍云ト云書物皆云トト云ト云ト指出は紙のレソ
 書は道光十九年より今年まで二十年云トト注
 云トト云ト同人ト草漢トト云ハ毛賦法始末を考
 略方ト旅館ト海軍兼歩兵隊江清館ト記云ト
 書ト引合せトト多分の遺ハも云ト
 八日快晴候也あるトト云ト云ト云ト云ト
 八日快晴候也あるトト云ト云ト云ト云ト

といふ者来り面會しときよしと任させ違ふ
 と懐中より一冊の本を出して見せあり其名
 を東洋紀行といふこれハ嘉永五年亞美利加
 國の船始て日幸し来りし時の書翰を以て者
 にて其時の日記あり兩國の時傳船が玉一も
 執上せしよし翁彼下田横濱杯の多しとて書
 する面白き書なれを借観しと偏り我日記終
 の巻に其書も挙しなり

長毛賊始末を記しすよ述

支那婦人之図



支那婦人之図

同男子之図



今茲は倭國賊亂の擾攘を尋ねるに抑度申の
 紀年四月申長毛賊とて明人於餘頼の者共お
 集まり蘄州^{台地}及ハ赤興^ふと結地方を攻取り
 と進と鎗江^同丹徒^同常州^等を陥し入死亡の
 者もも教一難と續入て招は月も既と是とあ
 り事るうと上海^缺より討手の官軍李^等等々
 いへる者如大将とて英吉利西佛郎西の兵を
 一子とあてせ即ち同所をむけと進發とるれ
 去るはりの長毛賊も是ととまり兼と引返り

大己
 三
 三

礼をうとまれば地も速に取返し今日迄も嚴
 重に防ぎ居たり其後又々蘇州に礼入の賊追
 く人数加り勢ひ盛に成又々上海より西北方
 凡十里許の處に營をうまへしつるより英
 佛の二軍これを防くよつて賊の方より寧
 寧波抗おの地を断切を手足を切るめよつて
 上海の地を袋の中詰物を取よりやきし其
 近傍に營を設第一手を跡に遣兵を遣て浙
 江省に討入りし先づ西牟三月六日海晏

平徳の地而不足同月九日右浦に攻入右三ヶ
 所ハ江南浙江兩所の境肝要な地處に賊軍は
 方への通路自在を謀り第一に攻取しつる志
 ありし九月朔旬浩州を攻取忽に南浙の地
 の宜善蘭溪地を討取又十七日蕭山並に童
 関鎮地を討取廿九日又紹興府城一礼入
 せり續て洪化俞姚慈溪等の諸縣を攻取寧波
 府城に押寄せ城亦五六里に營を設居其勢ハ
 甚勇猛しし軍威吊りか多し此の形勢に

及不必寧波府也為城子到る一杭外府也浙
 江省中管を頼み手足と可為の地あり然るを
 寧波府急と及ハ一ハ防禦必何とも存一難
 く兵糧亦乏とわく事也ハ急状を以て上海元
 救を乞ふ事右急状十月廿一日上海より
 け札を繕り評決し忽ち蕙香三艘を以て米粟
 三千石火藥五千斤西洋砲の大砲子銃を積込
 錢塘江より杭州をむす運送す事是より一
 と杭州城も一海軍勢を得といへとも四面の

糧道を切らさるるハ所詮古久の蕙城を難
 うと一ハ事也ハ如ふと寧波府杭州各地ハ
 賊半をれ上流も逆ハ是れ一ハ且胡何
 府城も賊也ハ圍まれ多る事七夜之然とも官
 軍將也を合せ防守をせし事未夕降参せし
 今賊も又やふる事法きき一何り且近日も樓
 玄も来りて杭州を救はんとも其謀果しとも
 己ありし時を杭州府城も亦拒ふへ之福建
 の地も且自より廣西の賊徒起り建寧府より

新編州まを攻入厦門同安也毛す之六は強劫
 志以る如幸と臺灣の軍兵七千余人厦門に到
 り市れハ賊号を以て大に志を再ハ東漢銘に攻
 入りハ有勅旬福建省の總督拾翁余少軍を
 引率して延平府に到るおれよよつて賊徒又
 志れと廣西進よ退きぬハ建福省や、平安
 とす然るよ山東省よハ小賊蜂起し温かぬ
 金陵會賊の脅威の時もすよ峰起せり今日より以
 前の子を以て今日より後の子を考ふるよ生

と何意の由より平安をらんよハ實に測るハ
 りらぬと云

思ひきや實に國の民学も元々ハ此學に
 在りたるものとき

中一りこさめふる様館コンナルニイルを立
 ちたりテレ船に海に

中二日西洋五時香港の隣を去帆去船日快晴
 海中は霧を曇茫やして春夜中をあり夜に入
 て春風吹出一舟行と云述也

十三日空晴也、あつきと四五月の如く水面
　　舟を去船遅し、舟の五時より今日十二時
　　北緯中八交五十分、経度百十交四十七分、
　　僅二百四十五里あり
　　十四日東風北緯中六交二十三分、経度百十三
　　交二十四分、八抄海路三百十里、此日を以てリ
　　ン夕ク日と留へ日曜を乘り、舟中舟上下を幾
　　昔に万々を也、ぬふりあり、ぬきよよつと或
　　ハ酒をのこ或ハ自利をくくかくくを於て水

夫もま公ハ世に凡そ海外の諸國皆これに
　　習と也

十五日十六日、毎日とも、又、海自強之測量也、
　　さききあり、よきとさき

